第２節　泥沼の三角関係（第２話　書庫に滴る愛蜜）より抜粋

地下の書庫の鍵を開け、２人は中に入っていく。
書庫の中には何列もの書棚が並んでおり、過去の書類がぎっしり保存されている。
私が台車を押しながら奥へと進んでいくと、後ろから優香が「私、我慢できない…」と言った。
「この前もお預けだったし…。でも、お母さんが家にいるとできないでしょう…。しばらくお母さん出張ないって言ってたし…。」
「なかなかチャンスがないよね…」と言い、私はさらに奥へと台車を進める。
すると優香が「だったら、今からここでしませんか？どうせ、誰も来ないし…」
「えっここじゃまずいよ」と振り返ると、優香はブラウスの胸のボタンを外して、私を見つめている。
「えっ？本気なの？」と優香に尋ねると、「誰も来ないから大丈夫ですよ」と私にキスをしてきた。
確かに、ここの書庫はうちのフロアー専用の書庫だし、ここに保管している書類はめったに必要としない。
おそらく、一日中ここにいても、誰も来ないとの確信があった。
私は優香を書棚の奥へと誘導し、濃厚なキスを交わしていた。
優香の舌が私の舌に絡みつき、そこを伝って私の唾液が優香の口の中で交わっていく。
唇を離すたびに、濃厚な唾液は糸を引き、書庫の薄暗い電灯に照らされてキラキラと輝く。
しばらく２人は抱きしめあいながら、濃厚なキスを続けた。
彼女のブラジャーのホックを外し、ふくよかな胸に頬を埋める。
乳首を舌で転がしながら、時より軽く噛むと、優香は小さな声で「あっあっん」と声を出す。
彼女の下半身に手を下ろし、パンティの上からあそこを触ると、既に愛蜜でグチョグチョになっていた。
私はしゃがみ込み、優香のスカートの中に頭を入れ、パンティの上から溢れ出した愛蜜を優しくすする。
熟した果実の様な愛蜜の香りは、私の脳を麻痺させていく。
すると優香は自らパンティを下ろし、もっと愛蜜をすするようにとせがんでくる。
私は優香を書棚にもたれかからせ、優香の股を広げてあそこに顔を埋める。
そして、あそこから溢れ出す愛蜜を優しくすすってあげる。
優香は時より「あっん」と小さな声を上げ、腰をプルプルさせている。
こんなスリルある状況であったからか、優香の愛蜜は次から次へと溢れ出し、書庫の床に

滴り落ちている。
　すると優香が「そろそろお願い…」と言って、スカートのポケットから「はい、これ。この前、係長が私の部屋に忘れていってたもの…」とコンドームを取り出した。
　「えっ？そう言えば、この前、持って帰るの忘れてたな〜」
　「係長が枕元に置いて帰ったから、翌日、お母さんに見つかりそうになりそうだったんだから…」と、私の顔を太ももで挟み込み、私をイジメている。
　「でも、準備いいね！」と私が言うと、「こんな事もあろうかと思って…」と恥ずかしそうに優香は言った。
　私は立ち上がり、ズボンとパンツを下ろすと、優香が優しく私のジュニアにキスをしてくれた。
　そして、そのまま、小さな口にジュニアを頬張り、柔らかい舌で優しく舐め回す。
　見る見るうちにジュニアは膨張し、優香の口の中から飛び出した。
　すると、優香はコンドームの袋をやぶき、ジュニアの先っぽにコンドームをかぶせて、柔らかい唇でジュニアにコンドームをかぶせてくれた。
　私は後から優香の腰に手を回し、愛蜜が溢れるあそこに優しくジュニアを挿入する。
　優香は声が出るのを我慢しながら、ジュニアで激しく突くようにと腰を突き出してくる。
　私は優香の要求に応えようと、激しく腰を振り、ジュニアを優香の奥まで挿入する。
　優香のあそこは、私の腰の動きに合わせ、ジュニアをきつく締め付ける。
　私が腰を激しく振るたびに、愛蜜のペチャペチャという音が静まり返った書庫の中に響きわたる。
　優香のあそこからは愛蜜が溢れ出し、床に滴り落ちる。
　私は優香の髪をかきあげながら、優香の顔を抱え込み、ジュニアを挿入したまま優香と濃厚なキスを交わす。
　すると優香は体を反転させ私に抱きつき、片足を私の足に絡ませ、腰を強く押し当ててくる。
　私は優香の腰を抱え込み、さらに奥までジュニアを挿入すると、優香は強く私に抱きついて小さな声で「イッイク…」と言い、体をピクピクと震わせた。
　それと同時に私も優香を強く抱きしめながら、そのまま優香のあそこの中で大量のミルクを放出した。

　優香のあそこからジュニアを抜くと、愛蜜が床にこぼれ落ちそうになる。
　私は慌てて愛蜜をすすり、優香のあそこをきれいになめてあげた。
　すると優香は小さな声で「ダメッ…」と言い、少しだけシャワーを放出した。
　優香は恥ずかしそうに「ごんなさい…」と言い、私の顔に降りかかったシャワーを柔らかい唇で吸い取り、このまま濃厚なキスを交わした。
　そして、優香は私のジュニアに装着したコンドームを外し、滑らかな舌でジュニアをきれ

いにしてくれる。
優香の絶妙な舌使いにだんだん気持ちよくなってきたジュニアは、再び膨張し始める。
すると優香は膨張したジュニアを小さな口に含み、激しく刺激してくれた。
我慢できなくなったジュニアは、優香の口の中で２回目のミルクを放出した。

続きは本編にてお楽しみください！